

知佳子 令和4年7月度特別作品

坂の町 知佳子

娘のお産の手伝いで横浜に行きました。
近所の皆さんは、薔薇や紫陽花をはじめ様々な草花を育てておられ、歩いているとお互いに挨拶や会話を交わし、広場にいるような安らぎを感じました。
孫たちと過ごす懐かしい日々でしたが、自然に触れて季節を楽しむひとときは、かけがえのない時間でした。

見上ぐれば坂の上には薔薇の家

玄葵水遣る人に今朝も会ふ

十薬を辿りて聞いて水の音

子の手より天道虫の飛び立てり

白南風や影踏みの子の行き過ぎて

柿の花小径にいつか迷ひをり

嬰の顔眺めて通る夏の昼

みどりごの声する方に緑雨降る

老鷲の遠く聞こゆる雨上り

雲ひとつ泰山木の花の上

《作品鑑賞》

秋沙

「坂の町」は、娘さんのお産を手伝って横浜で過ごされた時のことを詠まれた作品である。自然に触れて、お孫さんと過ごされた日々を十句に詠まれている。

子の手より天道虫の飛び立てり

天道虫をお子さんの手に乗せっていると、急に飛び立ってしまった。驚いているお子さんと、見守る作者の姿が見えて来る。

柿の花小径にいつか迷ひをり

毎日、散歩している径に柿の花が咲き始めたので立ち止まって眺めていると、径に迷ってしまったのである。

雲ひとつ泰山木の花の上

雲の一つしかない空に向かって真白い泰山木の花が咲いている。作者は泰山木の花の下に佇んでしばし眺めている。

幼少期の冬

雲雀

私の幼少期と言えば、七十年以上前に在ります。その頃は、終戦はしたものの、被爆した広島県の住民はみんな、日々の生活に懸命でした。職業軍人だった父は、新しい職に就き、平和を毎日の暮らしを家族と共に味わっていたでしょうが、今の私の暮らしと比べて、大きな変化を思うとともに、当時の暮らしに味わいを感じたりもします。

堀炬燵けふも父は紙繕り繕る

針仕事まだ続けたる除夜の母

隙間風あるも構はず福笑

勝ちたさに歌語んずる歌留多取り

兄の独楽気性のごとく唸るなり

黒豆の鍋煉炭にずっと乗る

凧揚のただ赤顔で走りをり

冬の夜ゴム飛びのゴム繫ぎをり

冬帽の編み上がるのを待つてをり

スカートをとたくりゴム跳び春の土

《作品鑑賞》

前文を読む限り、作者は私と年齢が近く、幼少の頃の遊びも殆ど変わらない。一句一句にわくわくさせられ、七十年前に引き寄せられた。

堀炬燵けふも父は紙繕り繕る

紐のない時代、父の紙繕りは大切な仕事。それを子供なりに興味深く見ている。

勝ちたさに歌語んずる歌留多取り

兄弟姉妹が何人かいるのが分かり、賑やかな生活ぶりが見える。負けず嫌いな作者はひとりこっそり歌留多を覚えたに違いない。

スカートをとたくりゴム跳び春の土

女の子はみんなゴム跳びに夢中。その様子を「スカートをとたくり」と表現し、勢いよく跳ぶ姿を表しているのが見事だ。「春の土」で温かく結び、生き生きとしている。